

窯焚— KAMATAKI —

2008(平成20)年4月4日鑑賞<GAGA 試写室>

★★★



監督・脚本・編集＝クロード・ガニオン／出演＝マット・スマイリー／藤竜也／吉行和子／
リーゾル・ウィルカーソン／渡辺奈穂／クリストファー・ハイヤデイル（ティ・ジョイ配給
／2005年カナダ、日本合作映画／110分）

……カナダ人監督クロード・ガニオンが、信楽を舞台として、窯焚（かまたき）にみる日本の伝統美を映像に！ 心に傷をもつ22歳のカナダ人青年は窯焚と格闘する中、また著名陶芸家が示す自然流の人生観と女性観に触れ合う中、いかに変化し成長していくのだろうか？ 外国人監督ならではの視点で描かれる日本の伝統美と女性観は新鮮だが、私には少し違和感も……？

カナダ人の目から日本の伝統工芸を！

1949年にカナダで生まれ、1970年代を日本で過ごし、79年に『Keiko』で長編デビューしたクロード・ガニオン監督は、日本で高く評価されたカナダ人監督らしい。そんな、カナダ人ながら日本の美と伝統を深く見つめ続けてきたクロード・ガニオン監督が、信楽を舞台に日本の伝統工芸「窯焚」をテーマとして描いたこの映画は、2005年モントリオール世界映画祭で5冠を達成したものだ。

主人公は、カナダで自殺未遂事件を起こすという、心のキズを抱えたまま日本にやってきた22歳のカナダ人青年ケン・アントワヌ（マット・スマイリー）。彼を迎えるのは、ケンの叔父であり、著名な陶芸家の石川琢磨（藤竜也）。こんな2人の国と世代の大きく異なる男の間に、窯焚を通した心の交流が生まれるのだろうか……？

陶芸の勉強に最適！

松山市生まれの私は白磁に藍色の図柄を特徴とする「砥部焼」が大好きだが、実際にこれをどんな風に窯で焼いて製作しているのかについては全く知識がない。歴史上有名な陶芸家としては、小学校4年生頃に読んだ柿の色を特徴とする『陶工柿右衛

門』がいる。もっとも、残念ながら私はそんな物語の中で陶磁器を焼いているイメージを想像するだけで、実際に陶芸の現場を見たことは1度もない。そんな私にとって、この映画にみる「窯焚」の姿は大いに勉強になるもの。

アメリカから留学し琢磨の下で窯焚の修行を5年間も続けている女性リタ（リーソル・ウィルカーソン）くらいになれば、信楽焼の良さがわかるようになるらしいが、私にはそれは無理。ましてや、来日したばかりのケンがチンプンカンプンなのは当たり前。

琢磨の女性観に注目！

この映画はクロード・ガニオン監督の視点から窯焚の伝統美を紹介するのが1つの目的だが、それ以上に、昔気質の男ながら、自由奔放に生きる陶芸家石川琢磨の女性観を示すことに重点があるのでは……？ 映画途中から、私は少しずつそんな感じが強くなっていった。

琢磨には妻み（渡辺奈穂）がおり、別棟に亡き師匠の妻である刈谷先生（吉行和子）が住んでいる。しかし、展示会で出張すると琢磨は堂々とバーの女性と浮気しているから、それにはちょっとビックリ。そのうえ、バーの中で近寄ってくる女性に対して「売春婦みたいだ」と嫌悪感を示すケンに対して、琢磨は「気のある素振りを示す女性にはやさしくしろ」と変な（？）アドバイスを……。

その程度なら琢磨は単なるエッチ好きの助平おじさんのレベルだが、映画後半には何ともショッキングな情景が……。まずは、そんな琢磨の女性観に注目！

琢磨の人生観は自然流……？

将棋の棋士には、羽生善治の泰然（無双）流、谷川浩司の光速流、森内俊之の鉄板流、佐藤康光の緻密流、米長邦雄のさわやか（泥沼）流などさまざまな名称が与えられているが、この映画にみる琢磨の生き方は一本筋の通ったしっかりしたもので、いわば「自然流」とも言うべきもの。したがって、クロード・ガニオン監督のもう1つの目的はそんな琢磨の人生観を描くこと。琢磨の人間に対する接し方はいかにも自然流で、リタに対してもケンに対しても、またアメリカからやってきた陶芸家スコット（クリストファー・ハイヤデイル）に対しても同じ……？ 他方、そこまで覚りをひらいていない（？）リタは、最初はきっと暗くじめじめしたケンを嫌っていたはずだ

が、少なくとも琢磨流に自然に接していたのは立派。

ところで私が驚いたのは、琢磨は窯焚の間リタとケンを同じ部屋に寝泊まりさせていたこと。いくら窯焚が共同作業だといっても、若い男女を10日間も同じ部屋で寝泊まりさせるのはいかがなもの……？ そう思っていると案の定……？

カナダ人監督の目には、弟子たちのそういう姿を含めて窯焚の世界の神秘性が珍しいのかもしれないが、これはちょっと……？

後半の刈谷先生の動静に注目！

この映画では琢磨を演ずる藤竜也の存在感が圧倒的に大きく、特に前半では吉行和子演ずる刈谷先生の出番はほんの少しだけ。そこで、これはきつと後半になると出番が増えてくるはずと読んでいると案の定……。

『佐賀のがばいばあちゃん』(06年)で元気なばあちゃん役を見事に演じていた吉行和子が、この映画では何と琢磨との「絡みシーン」を熱演！ 障子の隙間からそんなシーンを盗み見したケンはそれを一体どのように受け止めるのだろうか……？ そのうえ、「あるサイン」によって、刈谷先生からのお誘いを受けたケンが刈谷先生の部屋に入っていくと……？ この映画では、後半のそんな刈谷先生の動静に注目だ！

これ以上書けないのは実に残念だが、そこでどんなシーンが展開されるかはあなた自身の目で。多分これは、日本人監督では描けない、カナダ人監督独自の視点だが、私には少し違和感も……？

2008(平成20)年4月7日記